

[論文]

文化消費の劇場政治 ——演技としての政治レトリック——¹⁾

平野 順也

Consuming Cultures in Theoretical Politics : Investigating Political Rhetoric as Decorative Performance

Junya HIRANO

To a certain extent, the political sphere becomes a theatric sphere in which politicians perform, making full use of all fine clothes, smiles, and hairdos in their performances. By suggesting that politicians inevitably become theoretical performers in modern political sphere, this study investigates characteristics of decorative performance as a means of political rhetoric. This study employs Baldasar Castiglione's *The Book of Courtier* in which Castiglione illustrates the court to be a theater in which courtiers try to obtain favors from a prince through various kinds of performances. Castiglione's rhetorical theory is applied to discuss tactics employed in current politics. Through the course of this study, readers will learn that the transformation from a discursive political sphere into a theoretical political sphere is inevitable and that, in the latter sphere, "theoretical" performances to please people are the major forces to shape modern democracy.

キーワード カステリオーネ、劇場政治、宮廷人、ルネサンス、政治レトリック、ユーモア

「法律とソーセージは、作る現場を見ないほうがいい」という。
 〈中略〉現実の世界では、政治とは妥協の産物であり、民主主義とは政治の産物にほかならない。〈中略〉指導者が扱うのは、国家や民衆のあるべき姿ではなく、現在のあるがままの姿である。その結果、指導者に必要とされる資質は、必ずしも子供たちが美談として記憶するようなものばかりとは限らない——その子供たちを指導者に育て上げようというなら別だが。 (ニクソン、1982/1986、p.364)

0. はじめに

2001年に起こった同時多発テロ以降のアメリカ政府の対応、そしてイラク戦争を批判し、論議を呼んだドキュメンタリー映画『華氏911』の冒頭で、ジョージ・W・ブッシュ大統領やコンドリーザ・ライスといった政治家達が、テレビ中継前に髪形を整え、メイクを行われているシーンが映し出される。それは、公共の場に出る前に身だしなみを整える政治家達の姿というより、出番を待つ役者達の姿を映し出しているかのようである。多くの人にとって、小泉純一郎批判にみられる、政治の劇場化とイメージが重なるかもしれない。しかし、このシーンから我々が理解すべき点は、現代政治はメイクのような装飾的行為が必須であり、政治の性質を〈劇場型〉へと変化させることのできるテレビやマスメディアの性質ではない。このシーンが教えてくれるのは、そのように単純な劇場化へと進む現代政治批判ではなく、より複雑で恐ろしい政治の性質——議論によって進められる理想的な政治活動と劇場的効果によって進められる政治活動の間には、明確な境界線を引くことの不可能性——である。

演技と弁論との違い、もしくは役者と弁論家との区別は、キケロの『弁論家について』においても曖昧なままである。確かにキケロは、役者と弁論家の違いとして、前者は他人を模倣する者、後者は現実の物事に取り組む者であると説明している。又、彼にとっての弁論の優美さとは、表を飾るだけではなく血のように弁論に浸透しているものでなくてはならない。しかしキケロは、弁論家を説明するさい、俳優のイメージを繰り返し登場させ、弁論家が利用できる役者のテクニクについて述べている。例えば、効果的な弁論を行うためには、滑稽な役者のようにユーモアによって弁論を飾ることも必要であり、時に詩人のように喋り聴衆を魅了しなくてはならない。役者と弁論家は、それぞれ異なった役割、義務、目的を持つかもしれないが、〈テクニク〉という点からアプローチすれば、演技と弁論の間に明確な区別をキケロの理論に見つけることは出来ない。キケロは、演技が弁論家によって多少利用されることを認めても、政治が〈劇場型〉に変化するとは想像しえなかったのである。

ルネサンス期にMachiavelliとErasmusは、政治活動と〈劇場効果〉の関係

を異なった立場から議論した。Machiavelliは1513年に、〈演技〉の多用した効果的な権力の執行そして維持の方法を*The Prince*としてまとめた。例えば、彼にとって宗教は被統治者をまとめ、支配するために利用できる方法である。Machiavelliが〈きつね〉の狡賢さを君主に求めた3年後、Erasmusは国家を正當に統治することのできる道徳的君主の教育書、*The Education of a Christian Prince*、を執筆した。Erasmusにとってのキリスト教は、善良な君主になるために必須の信仰である。Machiavelli (1984) は、君主は必要とされる性質の全てを持つ必要はなく、所有するかのごとく現れることが大切であると説明している²⁾。それに対し、Erasmus (1997) は外見より精神の重要性を強調し、次のように述べている。もし、王冠やローブといった〈装飾物〉が君主を作り出すのであれば、舞台役者と君主の間に違いなど存在しない、と³⁾。真実の君主と舞台役者とを区別するのは、国家を愛する精神であり、キリスト教信仰である。政治的活動にとって演技は重要であるとするMachiavelliとは異なり、Erasmusは徳や信仰が役者と政治家とを区別すると説くが、プラトンの真実が存在しない世の中では、Erasmusが信頼をおく役者と政治家間の〈境界線〉は存在しない。MachiavelliやErasmusとは対象に、Baldasar Castiglione (1967) は、演技者としての宮廷人、そしてプラトンの真実を信じる宮廷人の対話によって、演劇と政治の複雑な関係を*The Book of Courtier*内で議論している。*The Book of Courtier*に関しては後で詳しく述べるが、Castiglione⁴⁾の議論から理解できるのは、パフォーマーと政治家、もしくは政治と劇場的効果は複雑に結びついており、決して切り離すことのできないという点である。

政治家が成功するには、演出されたパフォーマンス、適切な衣装、ユーモアのセンス、特徴的な髪形が重要な役割をもつ。本研究はパフォーマーとしての性質を政治家が欠くことのできない特色の一つと議論し、装飾物としての政治レトリックを考察する。まず、政治がいかに劇場のように存在するかを議論し、役者としての政治家の姿を分析する。次に、カステイリオーネの『宮廷人』から、宮廷人としての政治家の姿、そして装飾的効果のために使われている政治レトリックを説明する。最後に、それまでの分析と共に、現在政治における装飾的レトリックやパフォーマーとしての政治家を議論する。

議論を始める前に断っておくが、本論文は政治家をパフォーマーとしての素質のみで定義するのではない。高瀬（2005）が日本の政治家たちを言葉政治（人を動かすことが可能な戦略的な言葉）とパフォーマンスという二点に注目したように、それらの高度な能力によって、現代の有力な政治家は形成される。本論文は、言葉のレトリックではなく、パフォーマンスのレトリックを研究の対象とする。

1. 政治家と役者

ここでは、劇場として喩えられてきた世界がその性質を変え、文化を消費する場へ転化したかを議論する。劇を鑑賞すると同時に観られる客体であった観客が、舞台から一定の距離が保たれた安全な場所を提供されることにより、観る行為に徹することが出来るようになった。討論が主要活動であった公共圏は、文化を消費される場となり、民衆の〈目〉を意識する役者としての政治家が登場する。この変化の過程を「観劇の重層性」という観念と共に分析する。

1.1. 世界劇場から消費劇場

シェイクスピアは幾つもの作品の中で、世界を劇場に喩えている。例えば、「人の生涯は動きまわる影にすぎぬ。あわれな役者だ、ほんの自分の出場のときだけ、舞台の上で、みえを切ったり、喚いたり、そしてとどのつまりは消えてなくなる」（シェイクスピア、p.344）と、マクベスは述べ、その後、魔女達に翻弄され悲劇へと転落した彼自身の舞台の幕を下ろす。世界は劇場のように存在し、そこに生きる人間はみな役者のように自分の人生を演じる。磯野（2001）によると、世界劇場という観念は異教古代世界や原始キリスト教にその起源を認めることができ、ルネサンスへと受け継がれる。磯野はクルツィウスの論をまとめ、人間は神の創造物であり操られるようにして生きるという考えが、プラトンの『法律編』や『コリント信者への手紙 1』に見られると説明している。世界という劇場、そして人間という役者を作り出したのは神である。人間は、神、運命、そして時には魔女という力によって、人生を演じさせられる操り人形である。無論、このような世界観は現代にも

受け継がれている。しかし、近代には新しい〈劇場〉の体験が生まれている。

磯野は、実験的に模倣建設されたシェイクスピアのグローブ座の体験から、近代の劇場体験には決定的に失われている「観劇の重層性」という感覚を指摘する (p.18)。再建されたグローブ座の屋根はかやぶきで半開放され、当時の開演時間に近い昼間公演においては、「暗がりの安全な場所に身を置いて明るい舞台をそっとのぞき観るという」近代的劇場体験を得ることは不可能である (p.18)。グローブ座内だと、観客は舞台を観ると同時に、誰かによって観られている。また、劇場も天国 (天井) と地獄 (舞台下) を象徴するように設計され、例えば運命に翻弄されるマクベスを観ている観客も神から観られているという感覚を経験せざるをえないようになっている。しかし、「観劇の重層性」を欠いた劇場では、私たちは全く新しい体験をする。その例として、リンカーンに起こったある出来事があげられる。

1865年4月9日、南北戦争勝利の喜びに浸っているリンカーンは、文学談義を楽しんでいた。その日彼は『マクベス』から、ダンカンを殺し王となる場面を幾度か読み上げている。巽 (2002) は、その理由を、多くの血をながし統治者へととなった自分自身の姿をマクベスと重ね合わせているからではないかと解釈している。この解釈に沿えば、リンカーンも世界劇場に登場する自分をこの時意識したといえる。その解釈の信憑性を議論することはここでの本題ではない。注目すべき点は、それから数日後、彼に近代的劇場体験を明確に示す出来事が起こることである。4月14日に起こった、有名俳優ジョン・ウィルクス・ブースの手による、リンカーン暗殺である。巽によると、その事件が劇的であったのは、大統領が南部の狂信者の手によって暗殺されたからではなく、「最も著名な政治家を最も著名な俳優が射殺して、フォード劇場のみならずアメリカという舞台そのものを劇場へ変容させ、暗殺自体をみごとなスペクタクルへ仕上げてしまったからである」 (p.165)。巽は、劇場がアメリカへと舞台を広げることにより、観客がこのようなスペクタクルの演技手へ変化していくさまを述べているが、この事件を政治と舞台という我々の議論のもとに考察すると、偶然にも政治家とパフォーマー、そして政治と演劇が複雑に交差しており、政治を (又は、舞台を) 観劇する「重層性」を欠いた観客として人々が存在している様が理解できる。言い換

えれば、「観劇の重層性」を失うことにより、手に入れることのできる舞台と客席との距離がここに発生している。観客はもはや、劇を観ると同時に観られる世界劇場の客体ではなく、劇場に登場するパフォーマー（そして政治家）を〈観る〉ことに徹した傍観者となる。近代劇場には一定の距離を置き、明確な線で仕切られた「暗がりの安全な場所に」座り「明るい舞台をそっとのぞき観る」観客が存在する。

舞台と観客の〈距離〉は、藤竹（2002）によると、マスメディアの普及によってさらに広げられる。民衆が演説者の下に集まり弁論を聴いていた状態が、ラジオ、そしてテレビの普及によって、いかに性質の異なった行為へ変化したかを説明している。彼によると、群集が直接的に雄弁を聴くという、群集心理が働きある種の緊張感が張り詰める環境が、マスメディアを通すと親密でリラックスした雰囲気が漂う緊張感が拡散された環境へと変化する。政治家の演説を公共の場で群衆の一人として聴く状態と、何時でもコーヒーを入れることのできる環境で、テレビを通して演説を聴く行為は、性質が大きく異なる行為であるのは明らかである。緊張感が失われることにより、聴衆は簡単に傍観者へと変化する。

しかし、この拡散された緊張感にはマスメディアによってのみ形成されるとは考えられない。公共圏と私的領域の相対関係が崩れ、公共圏における私的活動の支配が大きく影響しているのではないだろうか。ハーバーマス（1962/1994）は論議の場所であった公共性が、いかに文化消費の場へと変化したか述べている。市民的文化は、生産と消費といった私的な経済活動を支配され、政治的な性質を奪われていった。文芸的公共性は文化を消費するレジャー活動へと転化したのである。読書クラブなどで行われた討論は姿を消し、「群居的な雰囲気」が支配するグループ活動が台頭する（p.219）。聴衆に、安全で他者を意識する必要のない場所が与えられたとき、「観劇の重層性」は失われ、舞台と観客としての〈距離〉が形成される。観客は消費に徹し、論議時に生じる緊張感に注意を払わなくてもよい。公共圏での私的活動は、人々に討論や政治的性質を持つ文化からの〈距離〉を与える。マスメディアはこの〈距離〉が形成される「暗がりの安全な場所」の提供を助長しているのである。〈距離〉の発生により、群集に観られることを強く意識し

たパフォーマーが登場するのは、必然的であるといえる。神の力により、世界は劇場のように存在していたかもしれないが、世界は今、消費される劇場と転化した。

1.2. 演技と政治

ミラン・クンデラ (1984/1998) は、〈観られる〉ことを強く意識している政治家のパフォーマンスを以下のような辛辣な言葉で批判している。「政治家は身近にカメラがあると、すぐ一番近くの子供に駆け寄り、その子を高く持ち上げて、頬にキスする。俗悪なものはあらゆる政治家、あらゆる政党や運動の美的な理想である」(p.318)。弁論者の信憑性を高めるため、もしくは雄弁をより効果的に行うために、外見は重要性を無視することはできない。アリストテレス (Aristotle, 1984) は *Rhetoric* の中で、弁論者はスピーチの内容を説得強く構成するのみではなく、聴衆を信じさせるための外見が特に政治のスピーチにおいて重要であると述べている⁵⁾。しかし、アリストテレスにとって大切なのは弁論の内容であり、外見はその内容に沿うようにしなければならない。観客の前で子供にキスをする弁論者は、アリストテレスには、想像すらつかなかった政治家の姿であろう。

クンデラが批判する子供にキスする政治家の姿には、前述した演技と政治活動の複雑に交錯した関係が現れている。群集から観られていることを強く意識することにより、政治家は演技者と姿を変える。例えば、群集の〈目〉を強く意識することにより、眼鏡といった物まで、演技者を悩ませる問題となる。神秘性を失うかもしれないとの理由で、近視が進む昭和天皇 (当時、皇太子) の眼鏡の着用に反対した侍従の不安や⁶⁾、将軍としてのイメージを保つため、国民の前で眼鏡を決してかけることになかったシャルル・ド・ゴールの意志⁷⁾からも理解できるように、単なる眼鏡であっても強大な (これらのケースではマイナスの) 効果を発揮する舞台の小道具となる。劇場的効果、または装飾的演技は、〈政治〉と複雑に絡み合って存在し、政治という舞台に登場する政治家は、観客の目を意識し演技する必要に駆られる。これは、ニクソンのド・ゴール分析からもよく理解できる。ニクソン (1982/1986) は以下のように述べている。「ドゴールは、政治というものが、その本質は

ともかく、手段において演劇に似ているのを知っていた。そして、彼が政治的な意志を通し得たのも、一つには演技力をマスターしていたからである」(p.65)。ニクソンは慎重に言葉を選び、演技を政治の本質であるとは語ってはいないが、それらの密接した関係を認めているのは確かである。ハーバーマスは、このような政治における広報活動の発展を危惧し、市民社会が再び封建社会化していると説明する。消費活動は、知名度といった無責任な大衆の反応によって左右される。公共圏が消費活動に支配されている今、公権力も一企業と同じように、知名度を上げるために広報活動に力をいれるわけである。彼はこのように述べている。

現代のパブリシティは封建制下の公事 (publicness) とたしかに似てくる。広報活動 (public relations) は、実は公論 (public opinion) にかかわる仕事ではなく、前に述べた威信 (reputation) という意味での評判 (opinion) にかかわる仕事なのである。公共性は、それに属する公衆の中で批判が振興される場面ではなく、それを取り巻く公衆の前で威信を展開すべき朝廷となったのである。(p.269)

政治活動はもはや、公共圏での議論によって展開されていない。ハーバーマスが述べているように、広報活動による知名度の向上、そして威信の形成・強化が政治を大きく左右する。前述したように、ルネサンス期において、政治家が威信の強化のために、どのように〈演技〉するべきかを議論し、政治の劇場性を提示した思想家が存在する。バルダッサレ・カスティリオーネである。

カスティリオーネはルネサンス期の有名な古典主義文人である。彼の著書である『宮廷人』には、16世紀はじめの文化の中心であった宮廷やそこに集まる人々の優雅な文化が美化された形で描写されており、彼の作品はエリザベス女王時代の詩人達に大きな影響を与えたとされている。『宮廷人』で描かれているのは、ある宮廷において様々な人物がゲームとして行う〈完璧な宮廷人〉についての議論である。この作品は文学的な価値のみではなく、政治レトリックに関する書であるとも考えられる。議論される宮廷人に必要なエチケットやマナー、又は音楽の知識やダンスの技量は、君主に仕える宮廷人が自分の意見を君主に説得しやすくするために必要な愛顧を形成する装飾

的なレトリックであり、君主に反論する際必要になるのが、それまでに装飾的なレトリックによって築き上げてきた愛顧である。プラトン (Plato, 1990) は、栄養のような真実を民衆に与えるために、薬としてだけではなく、料理という形式も必要であると説いている⁸⁾。しかし彼は、栄養を無視した、料理はただの〈こび〉となると強調している。劇場化した政治での、パフォーマーとしての政治家は、この〈こび〉としてのレトリックを多用しているといえる。

2. 『宮廷人』とその背景

この章では、『宮廷人』に見るパフォーマンスとしての政治レトリックを分析する前に、必要な知識を得るために、『宮廷人』が書かれた背景、そしてオポチュニストとしての宮廷人の性質を分析する。

2.1. カスティリオーネについて

ここでは、まずカスティリオーネの人物、そして『宮廷人』の書かれた背景を説明する。それにより、カスティリオーネの『宮廷人』という観念がどのように、キケロの弁論家、中世の騎士、そしてマキャベリの現実的な政治家といった、三種類の人物と異なるかが明らかになるであろう。

カスティリオーネは1478年、イタリアのマントヴァの近くにあるカサティコで生まれ、紳士としての教養をうけた後、ミラノのロドヴィコ・スフォルツァの宮廷で古典的教養を学ぶ。1503年にはマントヴァのフランチェスコ・ゴンツァガ侯に仕え、1504年にはウルビーノの宮廷(『宮廷人』の舞台)で外交官として活躍する。ウルビーノでの約10年間において、彼は「高貴な病めるウルビーノ公の忠実な友人であり、公妃の献身的な騎士であり、魅力と教養に満ちた廷臣たちとの友情と社交を享受した」(下村、1975、p.120)。おそらく、『宮廷人』は1508年に執筆が始められ、それから約10年後に完成され、カスティリオーネの死の1年前である1528年に出版された。『宮廷人』への反響は大きく、1600年頃には約60種原語の版本の刊行、そしてそれまでにヨーロッパの主要語そしてラテン語に翻訳されている。1561年に刊行された、トーマス・ホビーの英訳は特に有名であり、エリザベス朝期の文学へ

の影響が指摘されている⁹⁾。

15世紀から16世紀の間、各地の宮廷はルネサンス文化を实らせ、『宮廷人』の舞台となるウルビーノ宮廷も16世紀はじめにおいて、文化の中心の場であった¹⁰⁾。下村によると、ルネサンス期のイタリアにおいて、宮廷人とは紳士や教養人を意味した。宮廷以外では教養、マナー、芸術に親しめる場はほとんどなく、「軍人やいは詩人として、政治家或いは演説家として名声を獲ようとする野心をもつ者は宮廷に来て、軍事、外交、或いは役職で君主に仕えた」（下村、p.122）。ゆえに、宮廷人にとって〈よき宮廷人はどのように振る舞い、行動すべきか〉という教養を学ぶ必要があったわけである。Peter Burke (1996)によると、宮廷が文明化を示唆する場所として人々に受け入れられ、そこでの行為や文化が他の人々にとってのモデルやファンタジックな対象として存在し始めたのは、12世紀あたりである。Peter Burkeによると、貴族の行儀を意味する *curialitas* (*courtesy*) という単語がラテン語に認められたのは11世紀から12世紀にかけてである。アリステレスはマケドニア王・フィリッポスの宮廷でアレクサンドロス王子の教育、また、プラトンはシュラクサイのデュオニシオス2世の指導につき、2人は『宮廷人』の中でよき宮廷人として言及されるが、古代ギリシアにおいて、ルネサンス期に形式化された宮廷人は存在しなかった。文化復興と共に、宮廷文化が栄える前はどのようなものであったのだろうか。宮廷人のより正確なイメージを掴むためにも、ルネサンス前に栄えた弁論家そして騎士の文化を説明する必要がある。

2.2. 弁論家、騎士、宮廷人と政治家

下村が指摘するように、カスティリオーネの〈完璧な宮廷人〉の議論には、明らかに「プラトニズムの精神が全編を貫いている」（p.134）。しかし、カスティリオーネは、キケロからも強く影響を受けている。例えば、良い宮廷人を形成するのは、自然に与えられた才能か、それとも鍛錬によってかという議論は、キケロの『弁論家について』にあるよい弁論家の素質に関する議論を基にして進められている。Jennifer Richard (2001) が示唆するように、カスティリオーネはキケロから多くの観念を学び、自分の議論に使用している。しかし、カスティリオーネの宮廷人が、キケロの弁論家と同じ特質や役

割を持ってはいない。『弁論家について』は弁論家を雄弁であり活動的なヒーローとして扱っているが、宮廷人は実践力のない、楽しみを与えるアーティストである¹¹⁾。RichardはDaniel Javitchの議論を紹介しているが、それをまとめると次のようになる。弁論家は聴衆を説得し道徳的な行為へと促すために、集会で戦うわけであるが、宮廷人はただ聴衆を喜ばせ、愛願を得るために、宮廷でゲームを競う¹²⁾。『宮廷人』の〈完全な宮廷人〉の議論も、公妃エリザベッタのもとへ集まった人々が楽しむゲームとして始まり、ゲームゆえに緊張した議論になってはいない。議論は時に、夜が更けたから、もしくは長すぎて退屈になったからという理由で中断されることもある。『宮廷人』には〈戦う弁論家〉のような姿は見つけることが出来ない。この〈戦う〉姿の不在は、騎士と宮廷人を比較する際にも重要な観念である。

カスティリオーネは、武芸と文芸の二つが宮廷人にとって欠くことのできない要素であると、登場人物の一人であるルドヴィーコ伯を通して述べている。この根底に流れているのはアーサー王のような、中世の騎士の姿である。Peter Burkeが、アーサー王が「勇敢で礼儀正しい (courteous)」と騎士道物語で説明されていると指摘しているように¹³⁾、騎士は忠誠心や勇敢さのみだけで生きていたわけではなく、宮廷におけるの礼儀を無視することが出来なかった。例えば、Geoffery of Charniが記した*The Book of Chivalry*では、武芸だけではなく宮廷のマナーの重要性も述べられている¹⁴⁾。封建社会において、騎士たちは戦場においては武力であり、宮廷においては法の執行者であった。しかし、政治的対立や問題が騎士たちの戦闘を中心としてではなく、貴族の政治政策によって対応される機会が増えるにつれて、騎士道における武芸の重要性も薄れていった。

Bornstein (1975)によると、15世紀にはいると、騎士としての階級は、裕福で、上流階級の特権としての集団と変化し、騎士たちの兵士としての側面は、装飾的で儀式的なものとして存在するようになった。もはや戦闘に参加することが騎士としての役割ではなくなり、騎士道は伝統的なしきたりとして残されることになったのである。カスティリオーネは、宮廷人は武人としての性質をもつことにより、忠誠心、勇敢さ、そして勇気といった徳が備わると論じているが、そこには実際戦闘に参加するといったような緊迫した兵

士の姿は見当たらない。宮廷人が武芸に精通しなくてはならない理由は、競技に優雅に参加するため、そして、決闘を行わなくてはならなくなった時、臆病な姿をさらけ出し、恥をかかないようにするためである（子どもをからかい嚇すような臆病なまねをしたとして、ペルージャでの決闘が笑われている¹⁵⁾）。宮廷人の肉体の訓練のためにスポーツが勧められる際、戦争と共通点があるということで、狩猟が最も重要であると説明されている箇所からも、直接戦争に参加することのない宮廷人にとって、戦闘がいかに儀式化されたものに変化したかが理解できる。Richard Barber (1982) の言葉を借りるなら、騎士は忠実な人物であり、宮廷人は出世を夢見るオポチュニストである¹⁶⁾。

Machiavelliの*The Prince*に認められるのは、カスティリオーネの宮廷人により現実的に進化させた戦略的な政治家の姿である。カスティリオーネが描写するのは、〈完璧な宮廷人〉が君主に恩恵を受けるため、もしくは君主を英知に導くための方法についてだけではなく、音楽、宮廷婦人、そして冗談等についてのゲームとしての議論であり、マキャベリの戦略的な政治論は全く存在しない。さらに、カスティリオーネが最終章で、君主へ善を教える教育者としての宮廷人の姿を紹介しているが、マキャベリが彼の議論の中で強調している国家の統治に必要な〈効果的な真実〉としての知恵は、『宮廷人』には見つけることは出来ない。カスティリオーネの議論に認められるのは、集会で戦う弁論家や、命を賭けて戦い自らの信憑性を高めた騎士や、政治を戦略化しようと努めたマキャベリでもなく、便宜主義的な政治家としての宮廷人の姿である。

3. 「宮廷人」のレトリック

この章では、『宮廷人』で議論されている政治家の演技としてのレトリックを、〈花〉というイメージ、化粧、sprezzatura、そして詐欺という観念を中心に分析していく。

3.1. 調味料、花としてのレトリック

Kenneth Burke (1950/1962) はレトリックの性質の一つとして、〈呼びか

け)の行動を説明している¹⁷⁾。特定の聴衆に対して〈呼びかけ〉、なんらかの目的を果たそうとする行動をレトリックと呼ぶならば、レトリックは目撃されなくてはならない。宮廷人のレトリックは、観られることを強く意識した行為だといえる。また、Burkeは『宮廷人』のレトリックを自己顕示欲の強い行為であると説明している¹⁸⁾。特に第二章では、宮廷人が仕えている、君主や有力者に向けられた効果的なアピールの方法が紹介されている。第二章の談話の内容は、ダンス、音楽、服装、ユーモアといった、君主や有力者に対しイメージを高めるために使用される装飾的な行動について議論されている。無論、それらと共に、誠実、忠誠、献身といった性格の重要性も述べられている。しかし、ここでプラトンやキケロとカスティリオーネの違いを述べなくてはならない。前述したように、プラトンはレトリックを〈料理〉と例え、健康のために必要な栄養を取りやすくするための行為としたが、それは、あくまで栄養という最も重要な要素を〈こび〉ることなく、与えることの必要性を説いた。一方、『宮廷人』はプラトンのような、栄養を中心におき装飾的な料理の有効性を述べているとは考えられない。チューザレ卿が述べているように、宮廷人の優雅な行為は〈調味料〉である¹⁹⁾。ゆえに、どのようにレトリックを用いて、英知を効果的に伝えるかということが宮廷人には求められているわけではなく、全く関係のないシーズニングとしてのレトリックの重要性が強調されている。

第四章になると、オッタヴィアーノ・フレゴースを中心に、宮廷人の本来の目的として、君主に徳を教える役割が紹介される。仕える君主が、誤った道を歩もうとする時、君主を善へと再び呼び戻すのが宮廷人の役目であると論じられる。その後は、ピエトロ・ベンボによって宮廷人の愛が語られる。ここでの愛とは、プラトンの善と結びついた崇高な愛の形である。宮廷人が求めるべき愛は、恋人達の肉体的で官能の愛といった、地上の賜物ではない。〈完璧な宮廷人〉は魂や美といった天上からの至高の善を愛することによって、死後も神の元で存在し続けると、ベンボは我を忘れ、詩を詠むように語る。それまでの修飾的なレトリックを中心に議論していたそれまでの章と比較すると、第四章のプラトンの議論は、異色を放っているといえる。Kenneth Burkeは、第四章で描写されている宮廷人のこのようなレトリック

を「pure persuasion」²⁰⁾であると説明しているが、言い換えると、宮廷人として君主に従うというレトリカルな動機が、至高の善を愛する宮廷人として（すなわち、君主へ至高の善を教える教育者として）の動機と同一視されることにより、弁証法的に究極の動機のように表現されているわけである。宮廷人は君主へ仕えることによって、至高の徳を崇拜するのである。Burkeが、『宮廷人』は宗教の崇拜を宮廷の崇拜活動に置き換えていると指摘するのはもっともである。『宮廷人』のこのような主張が、マキャベリの現実的な政治家像と比較され、理想主義的な実用的ではない政治レトリックについての物語と批判を集める理由である。しかし、そのような弁証論的な議論の中においても、〈調味料〉としての装飾的なレトリックの姿が完全に消えたわけではない。なぜならば、宮廷人が仕えているのは必ずしも、絶えず論理的に物事を考えている人物でもなければ、特筆するような人間愛や優しさに溢れている人物でもない。宮廷人は、時に説得が全く不可能なほど、狂暴に豹変する可能性のある君主に仕えている。

例えば、第二章で君主からの命令への従属が議論された際、次のような話が紹介される。ローマの将軍・ムキアヌスがある男に、ある木材を購入するように命令したのだが、その男はより良質の木材を見つけたので、命令されたほうではなく良質の木材の方を購入した。これによって、ムキアヌスは憤慨し、男の話も聞くことなく鞭打ちの刑に処し、この男を死なせてしまう。この話が紹介された後、突然宮廷人の服装へと議論は変更され、第4章の理想的なオッタヴィアーノの登場まで、どのようにして意見の合わない君主を説得すべきか、もしくは、どのように悪へと進む君主を善へともどすのかといった議論は行われなまま物語は進められる。ようやくオッタヴィアーノが君主の説得について説明を始めても、そこに現れるのは、不徳に身を任せていても、宮廷人によって善へと説得によって連れ戻されるあまりにもナイーブな君主のイメージである。命令された木材を購入しなかったからといって、鞭打ちにするような君主の姿は議論の前半には登場しない。そして、ナイーブな君主に善を愛することを教えられる行為であるとして、オッタヴィアーノは、音楽、祝祭、そしてゲームなどを進める。彼は、これらの行為を〈宮廷の花〉であると説明している²¹⁾。無論、オッタヴィアーノにとって、これ

ら余興は、美（そして善）を愛することを君主に教えることの出来る芸術である。

このように、オッタヴィアーノの理想的な議論は続けられるが、議論が終わりに近づいた時、オッタヴィアーノは凶暴な君主に関して語り始める。今日の君主たちは、悪にそまり墮落し、適切な方法を選び説得をしなければ、狂暴に対応するような人物である。このような君主に対し嘘やご機嫌取りによって、仕える宮廷人も存在するが、完璧な宮廷人は狂暴な君主に善を教えなくてはならない。では、狂暴な君主の心を魅了し、恐れることなく正義を教えるにはどのような方法があるだろうか。オッタヴィアーノが、この疑問に明確に答えることは最後までない。しかし、可能な方法があるとすれば、それは二つ考えられる。一つは、Jennifer Richard (2000) が指摘するように、宮廷人が幼いプリンスを飼い馴らすように育てていく方法である。Eramusの*The Education of a Christian Prince*では、君主の幼い時からの教育についての議論がされている。Erasmusは、狂暴な君主や宮廷に充滿している〈調味料〉としてのレトリックの危険性ゆえに、宮廷人がキリスト教精神にあふれた君主を育成することの重要性を指摘しているのである。カスティリオーネにとって、そのような教育は〈飼い馴らすように育てていく〉方法と違わないであろう。狂暴に振舞うことが許される君主からの愛顧を確実に受け取るには、子供の頃からの教育が必要である。

無論、君主の教育に係わることのできる宮廷人は限られているので、狂暴な君主を説得するには別の方法が必要となる。オッタヴィアーノの言葉を借りるなら、二つ目の方法は、君主の歩む善への険しい道を「はなやかな花を撒き散らして」導いていく方法である²²⁾。ここで、〈花〉の喩えが再び現れる。しかし、始めに使われたときは、徳を愛する芸術的な行為として説明されるが、二回目に使われたときは、狂暴な君主のまえに〈撒き散らされる〉。ゆえにカスティリオーネの議論で強調されるべき点は、たとえ〈花〉が芸術のように、善を愛することを教えることが可能であったとしても、同時に〈花〉が装飾品として、〈調味料〉のように、そしてこびるように使用される可能性も潜んでおり、飼い馴らされていない君主を説得するためには、後者の可能性にたよらなくてはならないということである。一見カスティリオー

ネはプラトンの理想論を掲げているが、プラトンとの間には、埋めることの出来ないギャップが存在する。Lanham (1976) が指摘しているように、それは、プラトンは国家を語り、カスティリオーネは個人を語るからである。カスティリオーネの装飾的なレトリックも強い自己という観念から離れることはできない。例えば、〈花〉を必要な時は、〈花〉を使用し、〈花〉を撒き散らさなくてはならない時は、〈花〉を撒き散らす。そのような、行動はすべて宮廷人の思慮によって行われるのである。では、装飾的なレトリックとはどのようなものなのか、詳しく考察する。

3.2. 化粧とマスク

ドキュメンタリー映画『華氏911』に映し出されたメイクをする政治家の姿は、今からテレビというショーに出演するために、映えるマスクを身に付けているパフォーマーという側面をも持つ政治家の姿を浮き出させている。マスクを身に付けたパフォーマーとしての宮廷人は、カスティリオーネの議論に登場している。ルドヴィーコ伯爵は、宮廷人にとっての化粧の必要性を説明する時に、化粧をマスクと喩えている。劇としての政治の側面を考察して行くためにも、宮廷人にとってのマスクの必要性を中心に、Kenneth Burke が指摘するような、自己顕示欲の表れとしてのレトリックを議論する。

マスクという観念は宮廷人のレトリックを語る上で大変重要である。マスクは本来の顔を覆う。それによって、身分や本音を隠すことが可能になる。マスクを身に付け、本来の自分を隠すことによって、他人（もしくは、役）を演じることが出来る。Barbara A. Johnson (1987) が述べているように、カスティリオーネは「～のように見える」と「～である」という、外見と内面の違いについて議論しているが、明らかな答えを出すことはない。異なる内面と外見の見分けがつかないように存在するのが宮廷であるといえるだろう。Wayne A. Rebhohn (1978) は『宮廷人』に認められる、マスクと祭儀という二つの観念について議論している。まず、彼が述べているのは、ルネサンス期における、プライベートシーの不在である。エラスムス、カスティリオーネ、そしてシェイクスピアといった思想家や作家が社会を劇場として表現をしている理由は、メタフォリックな理由よりも、当時の社会において人々はいか

なる時も他者の目にさらされて生活していたからであると、Rebbonは説明している。社会が劇であるならば、宮廷というのもステージの一種類であり、宮廷人は教養を身に付けることによって、与えられた役を上手く演じることが必要である。前に述べたように、カスティリオーネはある場面で、マスクを化粧のように表現している。付け加えるならば、宮廷人の劇においては服装や、振る舞い、髪型、また冗談全てが〈マスク〉のように働くのである。しかし、カスティリオーネのプラトンの理想主義的側面も忘れてはならない。カスティリオーネは、外見が嘘のように存在する可能性を否定しないが、内面と全く異なる嘘や形だけの外見は長く成功することはないと信じている。Rebbonが述べているように、マキャベリにとっては、マスクとは虚構の象徴である。反対に、カスティリオーネにとっては役を上手く演じる可能性を広げる道具である。カスティリオーネが、厚化粧を批判しているように、嘘で塗り固められた外見はすぐひびが入る。不自然なマスク（外見）を身に付けては、役を上手く演じることは出来ない。カスティリオーネの理論における劇が成功するには、大変重要な要素が必要である。彼は、それをSprezzaturaと呼んでいる。

3.3. Sprezzatura

清水・岩倉・天野はsprezzaturaを「さりげなさ」と訳しているが、注釈で、彼らはsprezzaturaを「人に自然らしい、巧まない印象を与える種の気のきいた磊落さ、無頓着さ、それは計算されたものでありながら、人にはそれと悟らせないだけの才覚を伴ったものでなければならない」と説明している（p. 783）。カスティリオーネはカノッサの口を通して次のように語っている²³⁾。Sprezzaturaとは、わざとらしさが気品を打ち消す行為であるのとは反対に、優雅さを生み出す行為である。まず、sprezzaturaは芸術的手腕を隠し、気品のある行為がまるで自然に身から生じているかのように見せることが出来る。真の芸術とは、芸術的技術や意図が、わざとらしく表れていないものであり、芸術的技巧が隠されているものである。宮廷人の優雅さも、これと同じように、壮麗な行為を行うときほど、それに必要な技巧を隠し自然に振舞えば、宮廷人としての美を表現していることになる。Sprezzaturaが不在だと、厚化

粧のように、わざとらしい行為になるわけである。しかし、sprezzaturaを単純に、さりげない振る舞いと理解すると、宮廷人の演じる劇の性質を十分に理解できない。Sprezzaturaについて詳しく考察する必要がある。

Rebhorn (1978) は、sprezzareという動詞を説明している。Sprezzareは「軽蔑する」といった意味の動詞であり、sprezzaturaを「さりげなさ」と訳すと、「軽蔑する」といった、ある種攻撃的なニュアンスが伝わらないと、彼は指摘している。ここで重要なのは、さりげなさは、「無関心である」状態を表すのではなく、人工的な力、芸術的手腕の不在した純粋な状態を、高度な技巧によってごまかし、「軽蔑する」ということである。Rebhornによると、sprezzaturaの意味はもう1つある。宮廷人の「さりげない」行為によって、聴衆の心を惹きつける時、同時に、宮廷人はその「さりげない」行為を自在に操ることが可能なほどの更に熟練した技巧を持つという、聴衆が宮廷人に対して持つイメージを固める機能を果たす。言い換えれば、sprezzaturaは、宮廷人自信の、知に豊かで優雅な存在であるイメージをさらに強める機能がある。このような、Rebhornの説明は、Lanham (1976) が提示する、成功のためにsprezzaturaを身に付けようと入念に訓練を行うナルシシスティックな宮廷人の姿と重なる。Lanhamは、次のように説明している。さりげなさは芸術的技巧を隠すわけであるから、さりげなさを演出するためには、入念な練習が必要とされる。そこに存在するのは、ある種、ナルシシスティックな自己と聴衆の目の重要性である。無知を振舞い自己否定を行うが、結果的には聴衆によって自己は評価されるわけであり、自己はその多大な評価をえるべく、練習をおこなうわけである。Sprezzatura はどのように自然に行われても、また、どのように無知を演じながら演じられても、それは何らかの「成功」を求めて行われる²⁴⁾。

ここで、劇場としての宮廷に関連付けてsprezzaturaを考えてみる。宮廷人の劇で非常に嫌われるのは、sprezzaturaの反対であるわざとらしい行為である。カスティリオーネが厚化粧を批判しているように、わざとらしさは宮廷人に必要な気品の高い行為とかけ離れた行為である。では、先ほど述べたように「成功」を望んで日夜宮廷で劇に参加する宮廷人が、なぜ自分の技巧を思う存分出し役を演じることが出来ないのだろうか。言い換えれば、なぜ宮

廷人はレトリックを通して〈戦う〉ことが許されていないのか。この疑問に答えるためには、ユーモアの必要性を考える必要がある。すでに述べたように、「宮廷人」内で、ユーモアがトピックの一つとして議論されている。聴衆を笑わせることによって、他の芸術と同じように、心地よさを楽しませることが出来る。宮廷人にとって、ユーモアが重要なのは、宮廷という劇の舞台がその本質として競争によって構成されているからであろう。宮廷人は君主から愛顧を得なければならないわけで、他の宮廷人たちとの生活から競争的性質は切り離すことが出来ない。Falvo (1992)によると、そのような状況で他の宮廷人から、わざとらしい行動などせず、また他の宮廷人に不愉快な思いをさせることなく、「成功」を得なくてはならない。したがって、宮廷人は、さりげない行為やユーモアを通じて、非競争的な雰囲気を作り出さなくてはならないわけである。

Sprezzaturaとユーモアの関係は、Richard (2001) が議論している。Richardによると、カスティリオーネのsprezzaturaは、キケロが『弁論家について』で述べているdissimulatioから影響を受けている。Dissimulatioは英語ではdissembling、すなわち〈隠す〉という意味である。しかし、単純な〈隠す〉という行為ではなく、ユーモアによって本心を隠すといった行為である。勿論、ここでのユーモアとはただ聴衆を笑わせることを目的にしたものではない。カスティリオーネもキケロも、宮廷人そして弁論家は道化ではないと述べている。ここでのユーモアは、聴衆から良心を引き出すのに効果的な、なだめるようで、おだやかな態度である。例えば、キケロはアントーニウスを通して、この種のユーモアの効果について語っている場面がある。このときアントーニウスが物語っているのは政治集会という、激しい議論が行われる場である。彼は、不快感を与えられた民衆からの野次を回避する方法が四つあるとして、叱責、諫め、請け合い、そして弁解懇請をあげている。しかし、この後すぐに五つ目の方法を加える。彼は次のように述べている。「そしてまた、このときほど、威厳にかけてはおらずおかしみもあるユーモアやウィットの類、当意即妙の言葉やなにか寸鉄的な言葉が大いに役立つことはない」(p.86)。すなわち、まず述べられた四つの方法よりも、ユーモアが民衆から野次を受けるという大変攻撃的な場面において、効果があるというのである。

無論、この場合わざとらしくユーモアが使用されたら、更なる野次を浴びることになるであろう。そこで、必要なのはsprezzaturaである。宮廷生活も本来は競争の激しい場所であるとは、すでに述べた。カスティリオーネが宮廷人にとってのユーモアの重要性を議論する理由は、アントーニウスが野次を浴びるほどの攻撃的な状況を回避できるとして、ユーモアの使用をあげているのと同じであろう。成功を求めて集まった宮廷人たちはさりげないユーモアを使用して、シリアスな環境を隠すことができる。

しかし、ここで注意しなくてはならないのは、キケロがアントーニウスを通して、攻撃的な雰囲気の中でのユーモアの必要性を述べる時、叱責、諷刺、請け合い、弁解懇請といった四つの対処法も説明しているという点である。『宮廷人』では、ウィットは全編を通じて流れている雰囲気のように存在している。勿論、場を和ませるための冗談を語る必要性も、ダンスや音楽といった弁論的行動とは異なる、言わば装飾的な行為の一つとして説明もされている。しかし、『宮廷人』を通して、議論が熱を帯びるたびに必ずといって良いほど、〈笑いながら〉議論が中断される光景からも分かるように、シリアスさを消す雰囲気としてウィットは宮廷に絶えず存在している。

ここで、これまでのsprezzaturaに関しての議論をまとめてみる。Sprezzaturaは気品に満ち、優雅に振舞うために、宮廷人にとって大変重要な要素である。Sprezzaturaは、多くの知識や徳に富み、また芸術的手腕に長けている宮廷人の行為からからわざとらしさを消し、さりげなく、まるで自然に内から出るように見せる行為である。いわば、芸術性を消すための芸術であるといえる。しかし、それゆえにsprezzaturaの根底にあるのは、芸術としての強い特徴であり、この芸術に精通することによって他の芸術を思いの通りコントロールするという、ある意味、sprezzaturaを精通することは他の芸術を「軽蔑する」行為であるともいえる。ここで認められるのは、成功を狙う計算高い宮廷人の姿である。また、sprezzaturaはユーモアとも深く結びついている。なぜならば、宮廷は競争の激しい場であるが、宮廷生活に存在する攻撃性をむき出しにして生活するのではなく、ユーモアによってそれを隠し、成功のために〈さりげなく〉戦う必要が生じるのである。

カスティリオーネは、宮廷人がいかにマスクをかぶり、内面と外見を巧み

に使い分けたパフォーマーであるかと克明に描写している。文化の中心地であった宮廷は、パフォーマーの集まる、〈花〉が散りばめられた劇場へと変化した。「宮廷人」が記録しているのは、自分の信念のために戦う政治家ではなく、自分の便宜のために人を誘惑する政治家の姿、そして、前述したハーバースの議論のように、議論の内容よりも装飾的な〈花〉によって左右される政治の登場である。

3.4. 嘘と芸術

広報活動によって知名度を高めようとする政治家は一人ではない。宮廷人がライバルと競い〈愛顧〉を君主から得ようとするように、現代の政治達も威信を強化するための活動も他との競争の中行われる。PR戦争ともいえる競争は、時に〈さりげなさ〉を失い、ライバルの欠点を誇張した攻撃的な情報操作を目的としたネガティブ・アドにより行われる場合がある。PR戦争では、嘘の〈花〉を使用する宮廷人も登場する。

高木（2002/2005）は、ボスニア紛争におけるボスニア・ヘルツェゴビナ共和国とセルビア共和国の間で繰り広げたPR攻防戦を詳しく記述している。自国に利益のあるように世論を動かすために行う両国のPR戦が、誰もとめることの出来ないような巨大な怪物のように存在しているのが分かる。血を流す戦いを「実」そして、PR戦を「虚」と、高木は説明しているが、その「虚」の戦いは止めることが出来ないどころか、「実」を動かすほどの影響力は拡大し続けている。日本の政治家を見る限り、高木の「情報戦争」という言葉は強く現実みを帯びないかもしれない。では、日本ではどうであろうか。

衆議院議員の世耕弘成は2005年の衆院選で、自民党のPR戦略チームを指揮した。世耕（2006）の著書には、広報戦略という大義名分の下、政治がさらにゲームのように、もしくは劇のように、行われ始めた事実が認められる。例えば、選挙CM作りの際、視聴率28%を記録した小泉の8月8日の衆議院解散をうけての記者会見を使うことを希望するが、党の宣伝に総理大臣の業務である官邸を使うことが許されず、世耕ら戦略チームは「なら『セットで同じものを作ろう』と官邸のカーテンの材質まで調べて、8月17日の撮影では、それと同じカーテンをうしろに掛け、総理にはあの日と同じネクタイを

してきてもらった」(p.79)。ここでは、文字どおり「セット」が作られ、小泉が8月8日の記者会見を思い出させるように演技するわけである。無論、世耕のその他数々の手段を用いて、イメージを作り上げようとする。では、世耕の演出は、詐欺まがいの行為として非難されるべきであろうか。高木は、違うと言うであろう。ここでは、湾岸戦争時にイラク兵の残虐性を訴えた少女の証言のような悪質な嘘は見あたらない。しかし、小泉のライバルである他の〈宮廷人〉が(そして、自らがポピュリズムを助長する働きを持つメディアが)、ヒトラーの名を使い小泉の「ポピュリズム政治」を批判しているように、特定の人々にとっては政治的議論からはなれ、大衆意識を煽ることを主たる目的とした詐欺まがいの行為であると批判されるであろう。PR戦略チームのとった行動は詐欺かどうかという議論は、ここでは重要ではない。ここで重要なのは、詐欺まがいの演出と芸術的的技巧としての演出を区別する境界線がどこに存在するか、もしくは本当に存在するのか、という問いである。

カスティリオーネはフェデリコに、嘘と芸術的の手腕について説明させているが、そこでは装飾的な効果のあるものは嘘とは言えないと述べられている²⁵⁾。例えば、宝石をさらに美しく見せる技術は嘘ではなく、賞賛すべき技巧であり、宮廷人の装飾的レトリックにおいても同じことが指摘できる。フェデリコの議論は、政治の危険な側面を表している。それは、詐欺まがいのレトリックと芸術的の技巧の違いをあいまいにするからではない。彼は、宮廷人の詐欺まがいの行為の使用を認めるのである。彼の言い分はこうである。フェンシングの試合で負けたからといって、それを嘘や詐欺だと非難出来ないのと同じように、宮廷人が装飾的な効果でもって魅力的な印象を与えるという行為は、そのゲームに勝つために必要なことで、全く批判される行為ではない。また、昭和天皇とド・ゴールの眼鏡の演出効果については前述したが、フェデリコは同じように手袋や王冠の装飾的効果について言及している。例えば、シーザーは禿げ頭を隠すため王冠を好んでかぶり、フェルディナンドは肉体美を強調するように上着を脱いでいたが、美しくない手にはいつも手袋をはめていた。このような、たとえ小さな小道具であっても、装飾的効果を目的として使用することができる。フェデリコの議論は、詐欺と芸術的

技巧の差などなく、装飾的レトリックはそれら両方によって形成される可能性を強調しているといえる。

また、フェデリコはsprezzaturaと装飾的レトリックを関連付けて語っている。すなわち、欺瞞的行為において注意しなくてはならないのは、過剰な行為であり、過剰な技巧を非難するのは騙された本人より、成功を嫉妬するライバルが広めるものである。Sprezzaturaを保っている詐欺行為は、宮廷人にとって有益なレトリックであり、フェデリコにとって欺瞞そのものが悪か善かという議論を行う必要は全くない。言い換えれば、宮廷人が注意しなくてはならないことは、やり過ぎた演出を使用し悪評を得ないということであり、演出行為そのものではない。驚くべきことに、カスティリオーネはフェデリコに反対する宮廷人を登場させることなく、嘘と芸術的技巧の議論を終了している。

Machiavelliと同じ時代に生きた、イタリアの政治家であるグイッチャルディーニは、Machiavelliの現実主義的観念に認めることができる理想主義を取り除いた、より冷静な現実主義的な政治観を持つ。グイッチャルディーニ(1996)は、『リコルディ』内で、欺瞞は有益であると説いている。まずは、素直であるという評判を得て、重要な場面において欺瞞を使用すれば大きな利益を得ることができる。たとえ欺瞞を使用しても、素直であるという評判があれば、疑われず策略が信じられる、と彼は述べる。グイッチャルディーニも、フェデリコと同様、詐欺の有効性を認めている。悪評を得ず、素直であると信じられている限り、詐欺的行為は有益である。

Huffer (1995) は、パフォーマンスの根底に道徳的規範がなければ、大統領から独裁者まで誰であれ〈パフォーマー〉である、と説明している。Hufferにとっては、目的を達成するため民衆を〈誘惑〉しようとする、倫理観の欠けた政治家は「ドン・ファン」と同じである²⁶⁾。しかし、政治と倫理的観念を関連付けることは、少なくともグイッチャルディーニにとっては、意味のないことである。なぜなら、「道徳的な規範に従って国家を運営することはできない (Non si puo tenere stati)。なぜならば——その起源を考えると——すべて国家は暴力 (violenti) にあるからである」(p.69)。また彼は、共和国内であつたら正当な権力が存在するかもしれないが、外交となる

と話が別である、と指摘する。ドン・ファンとしての政治家にとっては、嘘と芸術的技巧の間に差などない。詐欺や欺瞞が悪となるのは、それが sprezzatura を欠き発覚するか、ライバルの告発によって悪評を得た場合となる。詐欺と芸術的技巧の差は倫理的観念ではなく、結果によって決定されるといえる。

ボスニア紛争でのPR戦争を取材した、高木は情報戦争における不正に対し、以下のような実直な意見を述べている。

情報戦争という事態を完全に規制しようとするれば、結局のところ政府などの権力が情報を統制支配する社会にするしかない。それを私たちが望んでいないのは自明のことである。もちろん、湾岸戦争の時に「少女の証言」がでっちあげられたような²⁷⁾、完全な作り事は非難されるべきだ。しかし、そうした明らかな不正がない限り、国際紛争をもビジネスの対象にするPR企業を百パーセント悪いと責めることは難しい。最も大切なのは、情報のグローバル化が急速に進む現在、PRの「戦場」は地球規模で拡大している、という現実にしっかりと目を向けることである。

(p.382)

現代政治が劇場のように楽しまれ、政治家がドン・ファンのようにパフォーマンスを駆使し観客を誘惑しようとするのならば、我々市民の役割は、詐欺と芸術的技巧との区別が可能な道徳的規範を要求することではない。市民の義務は、欺瞞にだまされることなく、議論に参加することにある。

4. 現代政治の劇場

ここでは、これまでの装飾的レトリックの議論を使用し、現代の政治がいかにPR活動によって動かされる場であるかを考察する。

4.1. 愛顧と政治

カスティリオーネから学んだ修飾品としてのレトリックの性質を以下のようにまとめることが出来る。修飾的レトリックは、「真実」を人々に受け入れやすくするために手を加える〈料理〉ではなく、味に加える〈調味料〉として存在する。言い換えれば、装飾的レトリックは〈花〉であり、宮廷人は

必要に応じて〈花〉を撒き散らし、君主からの愛顧の獲得に努める。〈花〉としてのレトリックは、服装、振る舞い、化粧、髪型、もしくは冗談にいたるまで様々な方法で行われ、〈マスク〉のように宮廷人の内容を隠し、外見を飾る効果を持つ。しかし、このようなレトリックが成功するために重要な要素がある。カスティリオーネはそれを sprezzatura と呼んでいる。Sprezzaturaを持つ宮廷人は、わざとらしい技巧に凝った行為ではなく、どのような芸術的技術をもさりげなさによって自然に身から出るようにみせることが出来る。宮廷人は sprezzatura に精通することにより、芸術的技術を思いの通りコントロールすることができ、競争の激しい宮廷で「さりげなく」時にはユーモアと共に、嫉妬深いライバルと戦うために必要な能力を得る。そして、宮廷人にとっては、修飾的レトリックは詐欺的行為と芸術的技術との両方から形成され、そこには道徳規範など存在しない。言い換えれば、装飾的レトリックは、時には詐欺的であり、時には芸術的である。宮廷人にとって罪があるとすれば、それは詐欺的行為を行うというより、sprezzatura を欠くことにより過剰な演出となり、ライバルから悪評をあたえられるという、宮廷人としての未熟さであるといえる。

この装飾品としてのレトリックは、本当に政治を動かすほどの力を持つ行為なのであろうか。すでに述べたように、Machiavelli をさらに現実主義的に発展させたグイッチャルディーニの政治論であるが、彼が装飾品としてのレトリックの効果を認めている箇所がある。そこで、彼は以下のように述べている。

私は若い頃、楽器を鳴らしたり、ダンスをししたり、歌ったり、その他つまらないことを習うことに対し嘲笑したものである。字を美しくかいたり、乗馬を習ったり、美しく衣装を着たり、その他人間の実質よりも飾りをあたえるようなすべての物事を軽んじてさえいた。しかし後になってから、私はその逆のことを望んだのである。そのようなことにあまりにも多くの時間を費やし青春をすりへらしてしまうのは不都合であるとしても、それにもかかわらず私は経験からそのような飾りや嗜みが人々に、高位の人々にさえ威厳と名声を与えるのを見てきたからである。そして、そうした嗜みを欠いているということは何か重要なものを欠いて

いるとさえ言えるのかもしれないほどにある。そうでなくても、そうした余興を数多く持っているということは君主の寵愛への道を開き、その者にとって時には大きな利益、昇進の原因、契機にもなるのである。世の中というもの、君主というものはかくあらねばならないという形では存在しないのであり、現にあるようなかたちでしか存在しえないからである。(p.172)

政治家はカメラに気づくと子供にキスをする。政治家はテレビで楽器を演奏し、冗談を言い、ネクタイを選び、眼鏡をコンタクトに変える。なぜならば、そのような行為が、民衆からの愛顧を得るために効果的であるからである。舞台の演出には道徳的規範もなく、詐欺と芸術的技巧の差もない。極論を言えば、民衆に受け入れられ、愛顧を得ることが出来れば、パフォーマーは何を行っても許されるのである。

4.2. 劇場政治の将来

Tocqueville (1835/2000) はアメリカ社会を繊細に分析し、劇場文化の発展によって民主主義に必須の活字文化の後退について言及している。劇を楽しむためには準備や勉強など必要なく、〈観る〉楽しみを求めて劇場へ集まる²⁸⁾。民衆は〈観る〉ことを愛し、〈読む〉ことを忘れていく。討論の場であった公共圏が消え、文化を消費する場が現在の公共の公共であり、政治は知名度向上を狙ったPR戦によって動かされていく。政治は劇場へと変化し、カスティリオーネが描写したような、魅力的に自分を見せようとする政治家たちが、劇の主演を競い戦う。そして、その劇を〈観る〉我々は、準備や勉強を行う必要など無く、パフォーマーとしての政治家が与えてくれる情報を消費し、パフォーマー達の目的とおりの愛顧を与える。

このような消費型政治の例を見つけるのは、全く困難ではない。ジョージ・W・ブッシュ大統領が、同時多発テロ後の9月14日にグランドゼロの瓦礫の山に立ち、彼と同年代に見える救助隊員の肩に手を組んでスピーチを行った時、そして2003年5月1日、空母エイブラハム・リンカーン艦にバイキング攻撃機に乗って登場し、飛行服に身を包んでイラク戦争の勝利宣言を行った時、小泉の言動や世耕の演出が、遅れを取っているように見えるほど、聴衆

から愛顧を得るために装飾的なレトリックによって演出が行われる、政治の劇場化が進んでいるのである。小泉の政治活動を、「小泉劇場」、「ワイドショー政治」、「プチカリスマ」による民主主義政治運営などと批判する人々は、ニクソンのように政治とメディアの和解、もしくはメディアの政治的な利用、を認めようとせず、PRの戦場が広がっているにも関わらず、政治の舞台を小さな規模に収めようとしているのではないだろうか。必要なら、有名なミュージシャンと共に数々の大学を回る政治キャンペーンを行う米政治家たちを詐欺師と批判することは簡単である。しかし、湾岸戦争の勝利宣言を父のブッシュ元大統領が行った時は、ホワイトハウス内の大統領執務室からであった約15年前の出来事と一緒に、現在の劇化した政治を考えると²⁹⁾、これからテレビといったメディアそしてPR戦略と結びついた政治は、はさらに巨大な怪物と成長していくとしか考えられない。

小泉をパフォーマーであると批判するのは、現代政治を大きな規模から見てはいないということになる。小泉はパフォーマンスに長けていたとは、言えるだろう。しかしそれは、他のパフォーマーの演技力が乏しいだけである。政治家がテレビに出演する時、それはパフォーマーが舞台上上がる時と同じであり、フェデリコの言葉を借りるなら、政治家が聴衆の前に現れる時、それはフェンシングの試合に参加するのと同じである。すでに述べたが、『宮廷人』の中で、アリストテレスとプラトンが理想的な宮廷人として紹介されている。しかし『宮廷人』第四章での完璧な宮廷人に関してのプラトンの議論で言及されているように、アリストテレスやプラトンは踊る必要などなかった。反対に、現代の政治体制は文化が消費される劇場型へと変革し、この場で政治家は〈踊る〉必要性に駆られるときがある。民衆が政治を劇場として楽しんだ、日本はポピュリズムではなくファッショ化へと進んでいる、政治がワイドショー化したと言い、小泉政治を批判する思想家や政治家たちは、自分たちの装飾的レトリックの能力を再確認することが必要であろう。どのようにして、自分の信じるメッセージが飾られるべきであったか、考える必要がある。政治を劇場化したのは、小泉ではない。彼以前にも、劇場に参加した政治家など沢山存在する。ただ、彼ほど卓越した演技者でなかっただけである³⁰⁾。

政治とレトリックが密接に繋がっている以上、そこには調味料を使い料理を行うのは自然な成り行きである。これは、あまりにも単純な事実かもしれないが、この単純さ、もしくは理想主義的な政治という観念が、その事実を隠そうとしてきたと言える。現実から目をそらし、エリート主義的な立場から〈騙された〉民衆を、スケープゴートとして批判することは簡単であろう。すでに引用したグイッチャルディーニの言葉を再び使えば、「世の中というもの〈中略〉はかくあらねばならないという形では存在しないのであり、現にあるようなかたちでしか存在しえないからである」(p.172)。劇場化した政治を現実のものとして受け入れるならば、小泉のような政治家に敗退を帰したくない政治家は、自らの演技力を上げなければならない。ここで強調すべき点は、ハーバースが批判する、消費文化としての劇場政治が、「現にあるようなかたち」の政治体系なら、そこに登場するパフォーマーたちは演技に長けていなければならないという点で、政治の劇場化を称賛しているのでも、政治家に詐欺まがいの技巧を勧めているのでもない。ニクソンが述べたように、今まで民衆は、作られた法律やソーセージを与えられていただけであった。これからの政治家は作ったソーセージを売りに出なくてはならない。どのソーセージを選ぶかは、民衆しだいである。

5. おわりに

前述したように、カステリオーネは詐欺と芸術的技巧の差を詳しくは議論していないが、詐欺に対して寛容であったわけではない。内面と全く異なる形を嘘によって作り出した詐欺者としての宮廷人は、そのギャップゆえ、一時的に喜ぶことはあっても、長く成功することはない。宮廷はとても競争の激しい場所である。宮廷人はライバルの宮廷人たちと、また突然狂暴に振舞う可能性を持った君主からの愛顧を競い生きていく。ライバルには邪魔をされ、君主は予想外の行為をし、時に嘘はみやぶられる。たとえ並外れた演技力を持っていても、成功を手に入れるのは簡単ではない。キケロが弁論の飾りについて議論する際、心地よだけの魅力は長く喜びを与えることは出来ないと述べている。過剰な装飾によって飾られた弁論家は、聴衆の感情を損ねやすい。なぜなら、弁論は感覚だけではなく、知性によっても判断され

るからである。過剰な装飾は簡単に飽きられ、野次を飛ばされ、辟易される。キケロは、装飾的レトリックの使用に関して、次のような警告を述べている。「万時において、最大の快樂には常に嫌悪感が隣り合わせている」(p.174)。現代でも、同じことが言える。ライバルの政治家たちは無能ではない。そして民衆も無知ではない。装飾的レトリックを多用する、演技のみに長けた政治家は、必ず劇からはずされる時が来る。大いなる嫌悪感と共に。

註

- 1) この論文は、2006年6月18日に日本コミュニケーション学会第36回年次大会で発表した『装飾物としての政治レトリック—カスティリオーネの「宮廷人」を中心に—』に修正・加筆を加えたものである。
- 2) pp.58-59参照。
- 3) p.17参照。
- 4) 以下、Castiglioneをカスティリオーネ、*The Book of Courtier*を『宮廷人』と表記する。
- 5) p.91参照。
- 6) 保坂(2006)、p.70参照。
- 7) ニクソン、pp. 65-66参照。
- 8) pp.71-72参照。〈こび〉は、君主が最も注意すべき罍であると、Erasmusは述べている。
- 9) 清水・岩倉・天野,p867,参照。
- 10) 岩倉・清水・西本・米川,pp.135-137参照。
- 11) *The Book of the Courtier*, p.465参照。
- 12) *The Book of the Courtier*, p.469参照。
- 13) pp.14-16参照。
- 14) テキストはRichard W KaeuperとElspeth Kennedyの編集による。
- 15) p.62参照。
- 16) p.334参照。
- 17) pp.38-39参照。
- 18) pp.222-223参照。
- 19) p.65参照。
- 20) p.230参照。
- 21) 「the flower of courtliness」としている。p.623参照。
- 22) 「the courtier will be able to lead his prince along the stern path of virtue, adorning it, however, with shady fronds and strewing it with gay flowers to lessen the tedium of an arduous journey for one whose endurance is slight」とある。p.288参照。
- 23) pp.67-68参照。
- 24) pp.150-152参照。
- 25) pp.149-150参照。
- 26) p.23参照。
- 27) 対イラク戦争を開始するか否かの議論が激しくなっていた1990年、クエート人脱出者・少女ナ

イーラが米下院公聴会で、イラク兵の残虐的な行為の数々を語った。しかし、1992年に、ナイーラが実はクウェート国連大使・サウド・ナジール・アル・サバーの一族であるという事実、そして全てはPR会社・ヒル&ノートン社がクウェート政府から、米政府の戦争開始を促すために行ったキャンペーンの一部であるとの真実が暴露される(川上, 2004, pp.92-99)。

28) p.465参照。

29) 2003年5月2日付け、読売新聞を参考。

30) わざとらしいウィットを使用した政治家の例として、以下が挙げられる。志位和夫が、ベルトを締め上げ、「身の引き締まる思いでいっぱいです」と語る、共産党のCM。公明党の神崎武法が、不正に対し「それはイカンごき」と駄洒落を言う。保守党のホスピタルをもじった「保守ピタル」というキャッチコピー(藤竹, p94)。又、2001年7月の参議院選挙で、小泉に対抗するために、民主党は鳩山由紀夫をキャラクター化した「ゆきおちゃん」のステッカー、T-シャツ、掲載ストラップを販売した。おそらく、小泉が得意とする「軽さ」を模倣した策であろうが、カスティリオーネの観念を使うなら、sprezzaturaの欠けた、わざとらしいレトリックといえるだろう。そして、2005年6月の衆議院選挙では、民主党は「あまりに真面目で、堅苦しい雰囲気を与える」(草野, 2006, p.69) 岡田克也の真面目な顔の横に、真面目なメッセージ「日本を、あきらめない」を載せるという「ゆきおちゃん」の時とは全く正反対のPR戦略をとっている。政治的関心をストレートに伝えようとする岡田を批判するつもりは全くない。そのような行為は、公平性を保ち、余分な演出を排除したNHKのニュース報道にたいし、公平であると攻撃するようなものである。しかし、草野(2000)が指摘しているように、NHKはその公平性のため、味がなく「面白みにかける」(p.128)と言うことも出来るように、岡田のレトリックもsprezzaturaのウィットが欠け、それが逆にいかにも政治家に特有の真面目さを強調してしまうという、わざとらしいレトリックになっているとの批判ができる。この両者の例は、宮廷という劇場において、宮廷人としてではなく、過剰なユーモアと共に道化として振舞った人と、宮廷人にも関わらず寡黙にゲームに参加した人であるといえる。

参考文献

- 磯野守彦(2001)「シェイクスピアの〈世界劇場〉」、『世界は劇場／人生は夢』(pp.11-37)、東京：水声社。
- 岩倉具忠・清水純一・西本晃二・米川良夫、「イタリア文学史」、東京：東京大学出版。
- カスティリオーネ、「カスティリオーネ宮廷人」、清水純一・岩倉具忠・天野恵訳、東京：東海大学出版会。
- 川上和久(2004)「イラク戦争と情報操作」東京：宝島社。
- キケロ(2005)「弁論家について」(下)、大西英文訳、東京：岩波書店。
- 草野厚(2000)「テレビ報道の正しい見方」東京：PHP研究所。
- 草野厚(2006)「テレビは政治を動かすか」東京：N T T出版。
- クンデラ, M. (1998)「存在の耐えられない軽さ」千野栄一訳、東京：集英社(オリジナル出版1984)。
- グイッチャルディーニ, F. (1996)「グイッチャルディーニの『訓戒と意見』(リコルディ)」、末吉考州訳、東京：太陽出版。
- 下村寅太郎(1975)「ルネッサンスの人間像——ウルビーノの宮廷をめぐる——」東京：岩波書店。
- シェイクスピア, W (1994)「マクベス」福田恆存訳、「新装・世界の文学セレクション36・シェイクスピアII」(pp. 275-349)、東京：中央公論社。
- 世耕弘成(2006)「プロフェッショナル広報戦略」東京：ゴマブックス。

- 高木徹 (2005) 「ドキュメント 戦争広告代理店：情報操作とボスニア紛争」東京：講談社。(オリジナル版2002年出版)
- 高瀬淳一 (2005) 「武器としての〈言葉政治〉：不利益分配時代の政治手法」東京：講談社。
- 巽孝之 (2002) 「リンカーンの世紀——アメリカ大統領たちの文学思想史——」東京：青土社。
- ニクソン、R (1986)。「指導者とは」徳岡孝夫訳、東京：文藝春秋 (オリジナル出版1982)
- ハーバーマス、J (1994) 「公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求——」細谷貞雄・山田正行訳、(オリジナル出版1962)
- 藤竹暁 (2002) 「ワイドショー政治は日本を救えるか：テレビの中の仮想政治劇」東京：KKベストセラーズ。
- 保坂正康 (2006) 「昭和天皇」東京：中央公論新社。
- Aristotle. (1954). Rhetoric. In D. McQuade (Ed.) & W. R. Roberts (Trans.). *The Rhetoric and the poetics of Aristotle* (pp. 1-218). New York: Modern Library.
- Barber, R. (1982). *The knight and chivalry*. New York: Harper & Row Publishers.
- Bornstein, D (1975). *Mirrors of courtesy*. Hamden: Archon Book.
- Burke, K. (1969). *A rhetoric of motives*. Berkeley, CA: University of California Press. (Original work published 1950)
- Burke, P. (1996). *The fortunes of the courtier: The European reception of Castiglione's cortegiano*. University Park: The Pennsylvania State University Press.
- Buruma, I. (2006, May, 8). Junnichiro Koizumi: The PM who shock up old Japan. *Time: Asia Edition*, 167-36.
- Castiglione, B. (1976). *The book of the courtier*. G. Bull. (Trans.). New York: Penguin Books. (Original work published 1528) .
- Falvo, J. D. (1992). *The Economy of human relations: Castiglione's Libro del cortegiano*. New York: Peter Lang.
- Hauffer, L. (1995). Luce et veritas: Toward an ethics of performance. *Yale French Studies*, 87, 20-41.
- Johnson, B. (1987). The fabric of the universe rent; Hamlet as an inversion of the courtier. *Hamlet Studies*, 9, 34-52.
- Kaeuper, R. W and E. Kennedy. (1996). *The book of chivalry of Geoffroi de Charny: Text, content, and translation*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Lanham, R. A. (1976). *The motives of eloquence: Literary rhetoric in the Renaissance*. New Haven: Yale University Press.
- Moor, M. (Director/Writer). (2004). Fahrenheit 9/11 [Motion Picture]. United States: Miramax Films.
- Plato. (1990). Gorgias. In P. Bizzell & B. Herzberg (Eds.), *The Rhetorical tradition: Readings from classical times to the present* (pp.61-112). Boston: Bedford Books.
- Rebhorn, W. R. (1978). *Courtly performance: Masking and festivity in Castiglione's Book of courtier*. Detroit: Wayne State University Press.
- Richard, R. (2000). "A wanton trade of living"? : Rhetoric, effeminacy, and the early modern courtier. *Criticism*, 42, 185-206.
- Tocqueville, A. de. (2000). *Democracy in America*. (H. C. Mansfield & D. Wihthrop, Trans.). Chicago: The University of Chicago Press. (Original work published 1835)